

開会 平成29年8月23日
閉会 平成29年8月23日

足利市総合教育会議

足利市教育委員会

平成29年度第1回足利市総合教育会議会議録

- 1 開催日時 平成29年8月23日(水)
開会 午後4時00分 閉会 午後5時15分
- 2 開催の場所 足利市役所4階 特別会議室

3 出席者

市長	和泉 聡
教育長	若井 祐平
教育委員	笠原 健一
教育委員	櫻井 淳子
教育委員	市橋 雅子
教育委員	菊地 義典

4 会議出席した事務局職員

総務部長
健康福祉部長
教育次長
行政管理課長
児童家庭課長
こども課長
こども課こども担当主幹
教育総務課長
学校教育課長
教育研究所次長
教育総務課庶務担当総括主幹
学校教育課指導担当指導主事(主幹級)
教育総務課庶務担当副主幹
学校教育課指導担当指導主事
教育総務課庶務担当主査

幼小ジョイントプロジェクト発表者
プロジェクト担当小学校教諭
プロジェクト担当保育所保育士

5 傍聴者 1 名

6 会議日程

日程第1 議題(1)

幼保小の連携における課題について

7 議事の経過

○ 開会

○ 和泉市長あいさつ(要旨)

小中学生、子どもたちは、今夏休みに入っているが、それぞれ充実した休みを過ごしていることと思う。今日は、幼稚園、保育所等から小学校に子どもたちが上がるときに、いかにスムーズに移行するかということテーマに、情報交換、意見交換をさせていただければと思う。事前のいろいろな準備の中で、この幼保小学校の連携、小1プロブレムというような言い方もするそうだが、その辺のことが教育現場において大変大切なテーマになっているということを知っているから、今日はスライド等も使いながら、現場の先生のお話を聞きたいと思う。

○ 若井教育長あいさつ(要旨)

夏休みに入る前に、子どもたちにいろいろな体験を積んでほしいと様々な場をお願いをした。どの子どもも充実した夏休みを過ごしていると思う。先日、市立美術館に行ったときに、中学生が来ていて、一所懸命に絵を見ながらメモを取っていた。美術館に行って絵を鑑賞して、自分の思いをまとめて提出するというような課題があったのだろうか。あるいは、この間足利学校に行ったら、刀剣が展示されている。親子で一所懸命ガラスの中の刀をじっと見入っている。そんな姿を見られた。また、この間渡良瀬グリーンプラザに行ったら、カスリーン台風の70周年の当時の被害状況が白黒の映像で映し出されていた。それを一所懸命見入っている子どもたちもいた。いずれも夏休みでなければできないような体験をしてくれているのだなと、うれしく思った。

いろいろな育ち方、いろいろな環境、いろいろな背景のある子どもたちがいるが、それぞれ健やかに成長してほしいと思っている。今日は、幼稚園、保育所等と小学校との接続ということテーマに話し合うが、充実した毎日を送れるようにどうあったらいいのか、行政として、学校として、あるいは保育所、

幼稚園等としてどうやったらよいのかという、そんな方向性が協議できればいいと思う。

○ 日程第1 議題(1)

市長

それでは、(1)「幼保小の連携における課題について」を議題としたい。

平成28年度に県が実施した幼小ジョイントプロジェクトを实践した、小学校の教員、保育所の保育士の報告。(パワーポイント・資料に基づき説明。)

市長

スライドの中で、水と土で遊ぶ授業と、保育参観で、なぞの島というところがあつたが、保育所と、小学校の生徒が一緒にやつた授業なのか。

事務局

別々にやっている。

市長

なぜ、幼小の連携になるのか。

事務局

学校の授業を保育所の職員が見に行つた。保育所の様子を学校の先生が見に来た。

市長

幼稚園、保育所から小学校に上がった時に、子どもたちの時間管理が一つの大きな課題だと思う。幼稚園、保育所はどちらかという、一時間目、二時間目の区別がなく、興味があれば自由にやらせている。小学校になると、1時間が45分ということに移行していく。そこを、どういうふうに、子どもたちにスムーズに移行させるかと同時に、現場の先生として、せっかくこんなに興味を持っているのに、途中でやめさせていいのだろうかという、ジレンマもあるのかなと思うが、その辺はどうか。

事務局

小学校は、保育所以上に時間が限られているのと、カリキュラム上やる事が決まっている。時間の面では、生活科は子どもたちのやりたいことをメイン

に行ったので、もっとやりたいという声は多く、1、2時間は伸ばした。区切り区切りを子どもたちも覚えてきているので、次の時間でやろうねというように、区切りはつけられたところはある。国語、算数などでは、難しい。

市長

その辺は、小学校の先生からすると、一概には言えないと思うが、保育所は、時間の感覚を子どもたちに身に付けてさせてから小学校に送ってほしいという感じなのか。

事務局

今回のプロジェクトに参加した保育所の子どもたちは、年長になってから少しずつ、針がここのところまで行ってからだよとか時計を見せて、学校に行ったら座ってなければいけないんだよとか、折に触れてさらっと言ってきてくれた。

市長

保育所は、その辺はどういうふうに心がけているのか。

事務局

自由遊びの時間は、できるだけたくさん保証してあげたいという感じで、遊びが盛り上がっていれば、もう少し伸ばしてあげたりもしている。ごはんの時間や、生活の中の区切れる時間に関しては、決まった時間を年長の後半からは、子どもたちに事前に知らせるようにはしてきた。

委員

今回は、隣接していたという地理的な要因も含めて、理想的な形が取れたと思う。これは、どこでもできるという感じではない。ただ、ここの研究会では、いろいろな学校の先生や保育所の先生が、子どもたちの様子を見て、話し合いを持った。それによって、市内の先生たちの共通理解として、こういうふうにすると段差が滑らかになるというのが広まったという点では、大変ベストな研究だったと思う。ただ、私は抵抗のない範囲でジャンプさせるというのもある意味大事だと思う。

小1プロブレムというのは、1年生の学級が成立しないということで、たぶんここはそんなことはないクラスだと思う。一般的に小1プロブレムというのは集団行動がとれない、あるいは授業中に座ってられない、先生の話を受けない、勝手に行動するというような、1年生に入ってそれなので、普通は、学級が途中で混乱すると学級崩壊というけれど、この場合は学級未形成という状

態になる。それであちこちの学級、あるいは学校で困って、これを何とかしなければならぬというふうな社会的問題になったのが、たぶん10年位前かと思う。これには複数の要因があるかと思う。その一つとして、この連携というか、1年生の子どもあるいは幼稚園、保育所の子どもがお互いに知り合っていて、それを活かすというのもあると思うが、現在は、学級は落ち着いてきているのか。私が学校訪問をした範囲では、聞いていなかったが、もし、足利の中でもそういうところがあるのかどうか聞きたい。

事務局

1年生の担任になった時に、子ども達は、なぜこんなに先生のことを好きなんだろうという気持ちを味わった。なぜなのかなと思ったが、今回の交流を通して、保育所の先生の話聞いたときに、保育所ではみんなのことを大好きだよ、いつでも守ってあげるよ、どんな時でも先生も友達もみんなが味方なんだよというのを、いつでもおっしゃっていた。保育所の子どもたちが、先生にすごく愛情をこめて接していき、最初から1年生も先生を信頼している。というのは、保育所、幼稚園のうちに先生たちが絶対みんなを守ってあげるよというのがあったのが一番大きいかと感じた。

市長

ちゃんとグリップできる感じの子どもたちか。

事務局

基本的には、先生が僕たちのことを一所懸命考えて言ってくれているという雰囲気を感じた。

事務局

私の耳に入ってきている範囲では、今お話の合ったようなクラスも勿論ある。また、席についていられないような子たちが多くて、一人二人がだんだん三人四人へ、またそれが七人八人へ広がっていってしまう、45分という授業の時間そのものが、その子にとっては長いということだと思うが、そういったことの報告も受けている。一律的にいいとか悪いとかそういうことではなく、あくまでも形成された集団の中でどうかと見ていった方がいいのかなと感じている。

委員

今でもやはり、存在しているという事実もあると思う。その場合に、要因は複雑だが、一つは家庭が変わってきている。核家族によって子育てが孤立しているのか、母子密着型になっているのか、対人経験の不足、おじいちゃんおば

あちゃんとの交流がない等あると思う。それと、聞くという習慣が形成されていない。これはとても大きいと思っている。一人の子に、その子に向かって言えば通じるのに、全体に言うと、自分に言われたとっていない。そういう場合がある。人の話を聞けるということは、生涯学習の基礎ではないか。保育所の時から、あるいはもっと小さい時から親子で会話をし、話したり聞いたりという関係を作っておく。愛情ももちろん含まれると思うし、これはとても大切だと思う。

あと一つは、特別支援の対応をしなければならない子どもが、学級未形成の中に複数いると、なかなか学級として成立しなくなってしまう。今は、保育所のころから特別支援の対応をしているかと思う。それを引き継いで支援シートみたいな形で引き継いでいけば1年の担任もそれを見て対応できると思う。

あるいは、足利の場合、市の対策で学びの指導員、心の教育相談員等を入れているので、その部分で対応できていることは大変ありがたい。担任だけでは対応ができない場合、個別に支援しなければならないという部分がある。そういう点では小1プロブレムの大きな一つとしては、特別支援の問題が絡んでいると思う。例えばそういう子が一人いたとして、その子にその子なりの対応をしていると、ほかの子が、みんな自分もやってほしくなって、同じ様な行動をしてしまうということもある。そのために学級としてうまく作れない場合も出てくるので、複数で支援という、市単独の事業が大変ありがたい。

市長

特別支援、学びの指導員、心の教育相談員等は、予算の論議にも関わってくる話なので、貴重なご意見でありがたい。

委員

保育所の保護者の方たちが、このプログラムに参加した子どもたちが小学校に行くときに、どういう評価をされたか。

また、小学校は、今回のプロジェクトに参加した保育所以外のところからも子どもたちが来ると思うが、そこに差があったのかどうか。

事務局

こういった活動の内容の他に、就学前には先ほどのお話にあったように、聞く力をしっかり育ててあげるといいということなので、1年間、聞く力には注目をして、子どもたちにはたくさん読み聞かせをしてきた。また、話を聞く姿勢等も事細かに言葉がけもした。

それと同時に保護者の方にも読み聞かせの大切なことを、毎回一人ひとりに語った。すごく伝わってくれて、どの保護者も毎週図書館へ行って、本を借り

てくれるまでになった。聞く力をたくさん今のうちに身につけて小学校に行く
と、困ることがすごく少ないんですよという話を保護者の方にしてきた。

2月に学校探検というのを経験させていただいて、授業を45分参加させて
いただいた。後ろの方で見ていたが、その時の様子なども保護者の方は、すご
く知りたかった。「座っていられましたか。」など知りたがっていたので、
「時々動きたくなってしまうたりしたのですが、座っていましたよ。」と、そ
んな話もした。また、「チャイムが鳴ったら先生教室で待っているから自分で
帰ってきてね。」と言って、休み時間を子どもたちと1年生で子どもたちだけ
で外に出ず経験をしたら、チャイムの音でみんな帰って来られた。そのような
話を保護者の方にすることで、一つの安心感は持てたのではないかと思う。

気になるところがあるお子さんに関しては、保護者の方と信頼関係を築きな
がら、「何らかの支援を受けた方が学校に行って困ることも少ないし、楽しく
学校に行けるということが、一番ではないですか。」という話をして、何人か
の保護者の方には支援を受ける方向で考えてもらったりもした。クラスの子
たちみんながみんな、そのまま普通学級に行ったのではなくて、何らかの支援を
受けている子たちもいるし、支援学級に行った子もいる、通級学級に行った子
もいるし、普通学級にいるが支援シートを一緒に持って入学をした子もいる。
ちょっと心配だったので、入学をした後、学校公開に行かせていただいて、実
際に担任の先生とお話をさせていただく機会を持たせていただいた。支援シ
ートを持っていった子たちが学校生活を楽しく送れているかなど話を聞いたと
ころ、何か困っているところがあって、保育所では、困っていた時には、こんな
働きかけをしてみましたなんて話をする機会は持てた。

事務局

今回のプロジェクトの保育所は近いので、この保育所から来た子たちは小学
校との距離感自分自身が近く感じていて、近所に住んでいる子たちなので来
る子も人数もクラスの半分くらいいる。その子たちは、ほかの子以上に安心感
はあったと思う。入学当初も、今回関わるうえでも。ほかの保育所、幼稚園か
ら来た子は、その保育所、幼稚園からは一人でという子が多かったので、最初
は確かに心細さというか不安な様子も感じられたりはした。しかし、穏やかな
クラスだったのもあるとは思いますが、交流が早い段階で始まっていた。自分の
ペアの子と交流しながら、「この小学校ではこういうことをするんだよ。」と教
えていた。クラスの中で、小学校に関しては、保育所から来た子よりはもしか
したら知らないっていうところはあったのかもかもしれないが、保育所との関わり
の中では、自分の方が良く知っているので、「ここは靴を脱いでいくんだ
よ。」とか「この遊具はこうやって遊ぶんだよ。」とか、そういう教える姿は、
自信をもって活動していたので、交流の中で自信を得た部分はかなり大きかつ

たと思う。

委員

今回のプロジェクトが、両先生が何度も安心感という言葉をお口にしてくださいました通り、子どもにとって安心感というのが一番大事なものだと考えているので、すごくいいテーマでやっていただいたなと思う。

今、幼稚園、保育園という分け方は正しくなくなっていて、認定園という言い方も増えてきていて、より複雑になったと思う。認定園になったのも、昔からそれを目指していたところと、最近始めたところでは、全然違ってくると思う。いらっしゃる先生も、保育士と幼稚園教諭では勉強していることが違うので、幼稚園と保育所、保育園は、かなり違うものになっているというのが現実だと思う。これが認定園になったところでどのように変わっていくかが課題なのだと思う。

いろいろな場面を見せていただいて、さっき先生のことが大好きという言葉があったが、保育所は赤ちゃんの時から来ている子がいたり、2歳の子が来ていたりすると、親代わりになる。幼稚園の場合は3歳、4歳、最近は3歳からだと思うが、やはり、保育所の子どもたちが大人に持つ信頼感と、幼稚園に入る子供たちが大人に持つ信頼感というのは、違って当然かなと思う。個人差もあるし、幼稚園差もあると思うが、もしかしたら、安心感、信頼感みたいなものが学校に来た時に学校の先生たちの信頼感、安心感につながっているかなというのものもある。

幼稚園は、早期教育とかいろいろ話があるが、子どもがこういうふうに過ごした方がいいという時間とは違う時間の過ごし方をしている幼稚園もあると思う。本当はもうちょっと時間に限りなく遊んでいい時期に、やはりプログラムに従って教育をさせてしまうと、本当に人生の初めの段階から怒られてばかりの子どもたちというのが出てきているのも現実かなと思っている。私が関わっている、つくしっ子相談、カンガールームという市の事業でお母さんたちの相談を聞いているが、そのお子さんの特徴にあった幼稚園や保育園を選ぶのが、子どもにとって一番大事なのでそうしましょうねということをお話ししている。人生最初の集団なので、そこで親がどういう保育園に入れるか、どういう保育所に入れるか、幼稚園に入れるかというのはすごく大事なことになると思う。そういうことをお母さんたちが相談できる場所というのが一番だと思う。先日母親相談であるお母さんに言われたのは、乳幼児のうちには保健師さんに相談ができたのだけれども、幼稚園に入ったらその幼稚園の誰に相談していいかわからない、幼稚園の先生に相談すると、文句って言われるかもしれないし、だれに相談していいかわからないと言われた。なるほどと思った。やはり、もちろん子どもたちの安心感も大事だが、親が安心していることも大

事だと思うので、お母さんが相談できるということは、すごく大事かなと思っている。安心感というのは、誰にでも一番大事なことだと思うので、先生にも安心して教室に行ってほしい。

しっかり教育ができるよう、安心して教室にいられることを保証することが、先ほどから話題になっていたが、なかなか集団生活に適応しにくい子どもたちがいる。足利市で出ている入学支援シートだが、幼稚園で、特に支援を受けていなくても、小学校に入ったらなかなか難しいなと思うお子さんには、幼稚園や保育所の先生の方が、これを出しておくで学校で丁寧に見てもらえますよというようなことがあると、お母さんたちが書きやすいと思う。どこかの市町村は、これは特別なことではなくて、全部のお母さんたちに自分のお子さんのことを書いてもらって、当然自分の子供が行く小学校に提出するというものに変えてしまったところもあるようだ。それがどういう功を奏したかわからないが、かなりそういうところも増えてきているようだ。

市長

入学支援シートは、どういう人に出してもらっているのか。

事務局

小学校に上がる際に、保育所と幼稚園等から、こういったところに注意して子供を見てくださいというようなことが必要な子に対しては、出している。数年前に比べると、入学支援シートを活用して、小学校の方に上げる数は確実に増えている。障がいがある子が増えているというわけではなく、入学支援シートの活用が広がっているというような捉えを私たちはさせてもらっている。

市長

親が全員書いて、うちの子はこういう子だからよろしくと書くのも手だと思う。

事務局

幼稚園、保育所等からは、個々の調査票が小学校に上がっていきます。

委員

幼稚園と保育所等と学校の連携というのは、かなりできているようだが、入学支援シートの場合は保護者が書くので、保護者が自分の子どもをどう見ているかというのを見極める一番大事なものだと思う。どうしても自分の子どもというのは、正しく見られないところがあるので、学校の先生たちや幼稚園の先

生たちの評価と、うちの子はそうでもないという話は、よくある話だと思う。そのあたり、両方から情報が来ていれば、学校の方は、お母さんにはこういうふうに見えるけれど、幼稚園ではこうだったんだなというようなところも含めて、お母さんにもいい言葉をかけていただけのかなと思う。

このプロジェクトは、どこでもやっていただきたいプロジェクトで、子どもたちの交流は5回という話だったが、このために先生方は何回くらい集まったのか。

事務局

交流プラス1、2回くらい。あとは、電話で話したり、直接伺ったりした。交流会が終わった後に話し合いの時間を長く持てた。

委員

教育委員として子どもを見ると、やはり、小1から見ることになるのが多い。ただ、いきなり小学生になるわけではないので、幼保小の交流とか連携というのはあらためて大切なのだなと気づかされた。子どもも子どもなりに、心配事、悩み事は当然あるわけで、1日の体の成長というのは1日大体同じだろうが、それが、小学校へ入学する、あるいは小学校に入ってというときにおいては、心の成長もより大きくなったり、心配事や悩み事もより大きくなったりすると思う。そういうときに、こういうことというのは当然大切なんだなと思った。子どもにとって当然それが必要なことということであれば、周りでもそういったことをどういう形でサポートするか、支援するかということは、これからのいろいろ考えるべきことかなと思った。

いくつかお尋ねしたいのは、今回ペアで活動したということだが、人数合わせはどうされたのか。また、中学や高校になってくると、4月生まれ、3月生まれというのはほぼ差がないと思うが、5歳児、6歳児その辺だと、3月生まれ4月生まれというのは結構違うと思う。そういうことでの対応が必要だったのか。今回のプロジェクトのことでなくても普段からでも、そういったことは必要かと思う。また、このプロジェクトをした中で、先生方が実際にご苦労されたこととかあれば、今後の参考に教えていただきたい。

事務局

ペアとグループに関しては、元々そういうふうに行きたいという思いはあったし、基本は同じ子とずっと居られたらいいねというのはあった。保育所、幼稚園は子どもたちのやりたいことを特に意識してやってきているのに、急に決まったことをさせるというのはすごく抵抗があったので、1年生に決まったことをやらせるというのを今回やらないということを特に意識した。昔の

遊びの時などは、けん玉屋さん、メンコ屋さんなど決めて、お店に来てほしい人に来てもらうことにした。それと、グループにする、ペアにすると、子どもたちに振ってみたときにも、同じ人の方が保育所の子は安心するよ、僕たちずっと一緒にいたものという話がすごく多くて、じゃあペアがいいんだねと決めたこともある。元々ペアでやろうねと決めたところもちろんあるが自分たちでそういうふうにしたいと言っていたところが大きい。

事務局

最初にペアを作るにあたって、保育所の方からは支援が必要な子の名前は事前にお話した。そういう子たちを受け入れてくれるような子をペアにしてほしいという要望は保育所の方からした。決まったペアは途中で交換することはなく、1年間ずっとそのペアで交流した。

事務局

ペア同士でくっついて、6人グループにしたこともあったが、その時には、手をつないで連れてきてねというときは、僕の担当はあの子だ、私の担当はあの子だと連れてきた。後半の方は、保育所の子自身が僕のお兄さんだ、僕のお姉さんだというふうにみんながとてもお互いに信頼しあった様子が見られたので、結果としてよかったと思う。

事務局

一つ負担をかけてしまったのかなと思うのは、一人の支援が必要な子が、大好きな子とペアになることで、活動に楽しく参加できるかなと思って、この子と組ませてくださいと、こちらから頼んだら、1年生の子にはちょっと負担が大きかったみたいで、すごく頑張りさせすぎてしまったのかなというようなところがあった。こちらからの要望を強く押し付けてしまったところがあったのかなと思いつつも、そばで声をかけたりして、後半からは表情が和らいで1年生の男の子も楽しく活動に参加していた。

事務局

今回は人数的には同数だったので、1対1になれた。その前の年は1年生が多くて年長が少なかったので、1年生が二人で年長が一人というペアになった。1年生が二人だったので、やることが少なくなってしまった分、今回の交流よりも1年生の方がちょっとバラバラしてしまったかなというところは見られた。

教育長

二つ、感じたことを言わせてもらいたい。一つは、小1プロブレム、落ち着きがないとか、出歩いてしまうとか、隣にちょっかいを出してしまうとか、そういった子どもたちがいる。そういう子どもたちを力で押さえつけるとかではなくて、なんでこの子がこうなるのか。不安だから何かイライラしているからだと思う。今回のこの研究では、先ほど安心感という言葉があったが、私はそこだと思う。なぜ子どもが出歩いてしまうのか、その背景を見てみると、何か不安があるのではないか。心配事があるのではないか。そのときにこの取り組みから見ると、一つは、子どもたちがペアとかグループとか人間関係の中で安心感を持たせようとしている。私はこれがすごく参考になった。それと、子どもたちの興味関心。やりたいことを自分で決めさせる。主体的に自分でやりなさいという。これは、幼稚園等、小学校1年生だけではなく、学校教育すべてに言えることではないかと思う。その子がなぜそういうことをしてしまうのか、背景を考えて、そこを不安感を取り除くこと、それがやはり大事なのだろうということであらためてこの研究から学ばされた。

もう一つは、幼稚園、保育所等あの時期だからこそちゃんと指導して身につけておかなければならないことがある。幼稚園、保育所等いろいろなところから一つの学校に来る。それぞれ保育の指針とか、あるいは幼稚園の教育要領とか、それに基づいてやっていると思うが、これは、一人の人間が成長して大人になっていく間のこの時期にはこれを身に着けたい、この時期にはこれをというのが、やっぱりあるのだと思う。それを作ってあるのが足利市の教育目標だと思う。足利市の教育目標で、乳幼児期に立ててある目標を見ると、よく出てくるのが、仲よくとか、善悪の区別をつけるとか、聞く態度などの基本的な生活習慣を身につけるなど、そういうものが出てくる。児童期青年期、いわゆる小学生、中学生に対しては、基礎基本を身に着けるとか、あるいは学ぶ意欲、それから共に生きることと、こういったことを身に着ける時期ですよというふうに足利市の教育目標は謳っている。もう一度そういうところから、足利市は、教育の基である教育目標についてもう一回確認して、生涯にわたって学び続けることに結び付けていく、それが大事なのではないかと思う。

市長

総合教育会議が始まって、具体的な話し合いは三回目だが、こういうふうに現場の先生に来てもらって話を聞くというのは大変有意義だと思った。現場の先生の話聞くからこそ、ああそうなんだと我々も気づきがあるし、議論がまた発展する。ぜひ、いろいろな方に来てもらって、PTAで活動をしている方、別の取り組みをしてもらっている学校の先生等にも来てもらってもいいと思う。そういうインプットがあると、非常に総合教育会議も建前だけではない中身の

あるものになっていくのではないかと思う。今日は、三人の先生方に感謝を伝えたい。

○閉会